

京都大学	博士（文学）	氏名	山下 泰幸
論文題目	現代フランスのイスラモフォビアに対するミドルクラスのムスリムの反応／実践の社会学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本博士学位論文は、筆者がおもにフランス・パリにおいて実施した、マグレブ（北アフリカ）系のミドルクラスのムスリム（イスラーム教徒）を対象とするインタビュー調査の結果に基づく、社会学的な質的調査研究である。ますます悪化するフランス社会のイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）のもとで、差別をなるべく回避して階級を再生産し、より良い生を送ろうとする、ミドルクラスのムスリムたちの日常の実践を分析する内容となっている。また、こうした分析をとおして、筆者が「方法的オリエンタリズム」と呼ぶ、既存の研究でしばしば見られる方法論上の問題点を乗り越え、イスラモフォビアの対抗言説となり得るようなムスリム研究を模索することが目指されている。</p> <p>第一章は、フランス社会で暮らすマグレブ系ムスリムが置かれている特殊な歴史的な文脈を、歴史学などの先行研究に基づきながら、（ポスト）植民地主義という観点から再構成する内容である。ここではまず、フランス革命から北アフリカへの侵略の開始、そして文明化の使命によって付き動かされた植民地帝国の建設が分析されている。19世紀から20世紀にかけてフランスは、啓蒙主義を体現する「文明化の使命」の名のもとに世界各地で侵略行為を行い、広大な領土を支配する植民地帝国を作り上げた。以来、北アフリカのマグレブ諸国は長期にわたる苛烈な植民地支配を受けた。特に、130年間にも及ぶ大規模な入植活動、さらに虐殺や拷問という凄惨な暴力を伴う独立戦争を経験したアルジェリアでは、農村の人びとの伝統的な生活基盤は徹底的に破壊され、無産市民と化した多くの農民が都市に流入した。こうした状況は、後に旧宗主国であるフランスの高度経済成長を支える労働力として、北アフリカからの労働移住の大規模な波が生じるその背景となった。今日のフランス社会で暮らすムスリムの大多数は、かつての植民地からの移住者およびその子孫であるとされる。</p> <p>後半部ではフランス社会におけるムスリムの定着の歴史が整理され、現代にいたるまで「ムスリム問題」が社会的に構築されていく流れが分析された。筆者が準拠する定義によると、ポストコロニアル状況とは、かつて宗主国の外部の植民地において生じていたような複数の文化の相互作用が、植民地独立後の時代において、旧宗主国の内部にまで拡張され生じている状況を指す。こうした定義に従うと、フランス国内で暮らす、かつての植民地にルーツを有するムスリムたちに対して、植民地帝国時代やそれ以前から連綿と蓄積されてきたオリエンタリズム的なムスリム表象に基づくステイグマが付与されている今日のフランス社会は、まさにポストコロニアル状況そのものである。</p>			

さらに筆者は、こうした植民地主義の歴史とも不可分であったような、啓蒙思想の流れを汲んだ国民統合イデオロギーである共和主義やライシテという抽象的な概念について批判的に検討している。現代のフランスでは、フランス革命の精神を受け継いだネーションの統合原理である共和主義やライシテ（国家と宗教の分離原則）を毀損する共存不可能な他者としてムスリムたちはしばしば表象され、その排除が正当化される傾向にある。ライシテがナショナル・アイデンティティとして認識される傾向が強まっている中で、その理念が有していた信仰の自由を保障するという側面は忘却され、公共空間における非宗教性の規範としての側面ばかりが強調されている。

第二章の前半部は、フランス社会で生じている宗教的な他者化の過程であるイスラモフォビアについて、その定義や、具体的な差別の現状を見る内容である。本博士論文においてイスラモフォビアは、オリエンタリズム的な思考様式に基づいて、イスラーム教徒（もしくはそうみなされる者）の有する文化的な差異を強調して他者化し、彼女ら彼らを劣位に置いたり排除したりするような文化的レイシズムの一形態として定義されている。イスラモフォビアは、植民地主義と不可分なオリエンタリズムによって形成されてきたイスラーム表象の（言説的な）蓄積を利用して作動している。現代フランス社会においては、ムスリムを対象とした根強い就職差別や入居差別、路上でのヘイトクライムの増加や、ムスリムの排除を呼びかける極右政治家の台頭など、イスラモフォビアは悪化の一途をたどっている。ライシテが植民地主義と結びつきながら極端に解釈された結果、いわゆる2004年の「スカーフ禁止法」をはじめ、ライシテを理由とした種々の法整備やそれに向けた過熱した議論の影響により、ムスリム女性の社会参加が阻害されている。また、イスラームを標榜する凄惨なテロ事件がフランス各地で繰り返される中で、例外法規が常態化され、「過激思想」と無関係なムスリム個人や組織に対する家宅捜索や解散命令が出されるなど、ムスリムに対する「集団的懲罰」の様相を呈した司法判断が続いている。以上のことから、筆者はイスラモフォビアの制度化が進行しつつあると述べている。

後半部は、学術的な研究もまた、イスラモフォビアやオリエンタリズムの影響を受けうるということを考察する内容となっている。自己認識と他者認識は常に相互に影響を与え合うものであるため、フランス社会においてムスリムであることを理由とした排除がはびこる中では、イスラームを信仰するマグレブ系移民の第二世代の人びとについて社会的に分析するに際して、ムスリムという分析カテゴリーを用いることの妥当性はますます高まっている。しかしながら、学術的な研究においてムスリムたちの実践が分析される際には、しばしばその文化的差異を前提に、信仰の強度や信仰実践の多寡、イスラームの教義による説明が試みられるといったように、単純化された方法論が選択される傾向にある。このように、文化的な他者とされるようなマイノリティを研究する際にのみ、文化決定論に基づくような単純な方法論が選択されるという問題を、筆者は「方法論的オリエンタリズム」と呼んでおり、こうした方法論を

乗り越えるムスリム研究を目指すことが、本博士論文の重要な目的となっている。筆者によると、こうした方法論上の問題が生じるのは、ムスリムを対象とした研究を行うものも社会のイスラモフォビックな文脈から自由ではないからであり、オリエンタリズムという共通の畏にからめとられることで、研究者の選択する方法論に現実社会のマイノリティとマジョリティの権力の非対称性が反映されている。

第三章ではまず、こうした学術上の問題を乗り越えるために、ムスリムの実践を解釈する際には、ジェンダーや階級、世代間の差異、学歴や居住地など、信仰に直結する要素以外のさまざまな変数に注目し、重層的な分析を試みるのが重要であると述べられる。本博士論文ではその中でも、以下の全ての章にわたる共通の視座として、階級に特別な注意が払われており、ミドルクラス（とりわけアッパーミドルクラス）のムスリムの日常の実践に焦点が当てられている。なぜなら、フランスのムスリムをあつかう先行研究はしばしば、移民をルーツとする庶民階級の人びとが集住するような低家賃住宅で構成された団地が立ち並ぶ大都市郊外で暮らすムスリムに関心を集中させるか、そうでなければムスリムの信仰実践が原因で生じるさまざまなコンフリクトに関心を集中させてきたからである。これら一つ一つは重要な研究ではあるものの、全体的な傾向として、ミドルクラスのムスリムの存在が学術的研究において不可視化されていることは問題であると筆者は指摘している。宗教や人種、エスニシティに基づく分類統計が原則的に禁じられているフランスにおいて、フランスのムスリムの人口構成に関して参照可能な統計データは限定的であるミドルクラスのムスリムの実態を把握できるような量的調査はさらに少ないものの、近年の研究ではムスリムの職業的な多様性や、ムスリムの学歴がマジョリティのものに近似しつつあることが示されており、ミドルクラスのムスリムの存在が示唆されている。

そこで本研究に先立ち、筆者はフランスのムスリムの間で多数派を占めるマグレブ系のうち、移民第二世代のミドルクラスのムスリムに対して、主に首都パリ付近でインタビュー調査を実施している。学歴（日本の大卒相当以上に該当するバカロレア+3年以上）を主な基準としつつ、職業や経済状況などから総合的に判断し、ミドルクラスのムスリムのインフォーマントを絞り込んでいる。なお学歴が重要な指標とされているのは、フランスが、学校修了時などに取得する免状／資格類が職業的地位へのアクセスに決定的な役割を果たす「免状社会（学歴社会）」だからである。

筆者によると、ミドルクラスのムスリムを対象に含んだ質的調査に基づく先行研究の多くは、階級上昇移動に成功するムスリムたちを捉えるものであった。しかしながら筆者による質的調査の対象となったインフォーマント全体の傾向として、自分たちの世代のみで学業を通じた階級上昇に成功したものはほとんどおらず、多くのケースにおいて、移民第一世代にあたる両親、特に父親の学歴が高く、安定した職業についていた。そのため、本論文の以下の章で扱われているライフヒストリーはいずれも階級上昇の語りというよりも、イスラモフォビアという障害をなんとか回避しながらミ

ドルクラスの階級を再生産するような語りであった。

本博士論文の中心的な分析パートである第四章から七章においては、扱うインフォーマントの人数を最小限に絞り、十分な紙幅をもって当人ならびにその両親のライフヒストリーを描き出すことが目指されている。これは、各章において一つ一つのエピソードを分析する際に、その出来事を彼女ら彼らの人生の文脈の中に位置づけ、より共感可能な形でその実践を行うに至った、当人らの内なる合理性を描き出すためであるとされる。

第四章は、アルジェリア系移民二世のライラという高学歴な女性の語りに基づき、量的なアプローチにおいてマイノリティの同化の指標として用いられることの多い「言語」や「名前」という要素をミクロな観点から分析する内容となっている。移民第一世代にあたる彼女の父のモハメドは、娘であるライラに対してアラブ・ムスリム風であることが明白なファーストネームは与えず、そしてアラビア語も継承しなかった。ライラはそれにより、庶民階級を中心に編成されたエスニック・コミュニティに過度に取り込まれず、就職差別に遭うリスクも免れたと語っており、ミドルクラスの階級的再生産のために学業・職業上の成功を目指す上でポジティブな効果を発揮している様が分析されている。しかし本章では同時に、「同化」という現象は決して単線的かつ自動的に進行するのではなく、ジェンダーや階級による影響を受けながらさまざまな痛みや葛藤の中で経験されていることも述べられている。また、ライラには、こうしたことを通してもなお完全には同化され得ない側面があるが、彼女はこの自らの「異邦人性」をむしろ特別な計らいを受けるための資源として巧みに利用していた。

第五章では、周囲とコンフリクトを起こしかねないイスラームの信仰実践を回避することを自分の中でうまく正当化し、罪悪感をおぼえずにフランス社会の中に溶け込もうとするアルジェリア系二世のいとこ同士の二人の男性の語り分析されている。具体的には、エリートが集まる学校や職場において人的なネットワークを構築する上で、イスラームの食の禁忌を破ることに関して、ふたりはそれぞれ異なる論理でそれを正当化している。ラシッドという人物はこれをカビル（ベルベル人）特有の精神性であるとして合理化し、そしてハキムという男性はイスラームの啓典の意義を問い直すことによって合理化し、それぞれコンフリクトを生じさせずに学業ならびに職業上の成功を果たし、階級を再生産していた。こうした柔軟な実践を鑑みると、彼らの日常において、イスラームは不変的な規範として顕れているというよりもむしろ、彼らの日々の実践によって再構成されていた。筆者はイスラームをハイブリッドな文化的産物として捉え、こうしたイスラームのあり方自体が、現代フランスのムスリムたちが社会の中で非ムスリムと共に生きようとする意志を有していることの証左であると分析している。

第六章では、前章と同じアルジェリア系二世のハキムが、郊外のムスリムたちと自

らを差異化している様子に注目することで、あらためてミドルクラスのムスリムの社会における立ち位置の複雑さについて検討がなされた。筆者によると、ミドルクラスのムスリムたちは、共和主義イデオロギーによって非正当化されるようなエスニック的に同質なコミュニティや、社会問題の集積地とされるような「郊外」に集住する庶民階級のムスリムと自らを差異化するよう、社会的な圧力を受けている。しかし同時に、努力によって成功は可能であるという強い確信や、差異に開かれた多様な文化を愛でるコスモポリタン志向は、ネオリベリズムに適合的なミドルクラスの文化を示すものである。

第七章は、今日のフランスにおいて増加していると予想される、ミドルクラスのムスリムのフランスからのトランスナショナルな移住／脱出現象について検討する内容である。親族が被ったフランスによる過去の植民地主義的暴力の凄惨な記憶を継承するヤセフというアルジェリア系二世の男性は、「テロ対策」を口実とした今日のフランスのポスト植民地主義的な暴力を自ら経験した結果、ドイツへと国外脱出した。高い学歴や専門的知識、複数の言語を操る能力など、移住に十分な資源を有してゐるヤセフは、「新たなページをめくった」と語り、フランスに戻らないことを決意している。ヤセフの事例は、移住という現象がいかにも多様で重層的に条件づけられているかを実証するものであり、政治的な観点から分析される強制移住／経済的な観点から分析される労働移住といった単純な社会学的な二項対立に基づく分析枠組みを採用することはできない。

本博士論文の結論では、ムスリムを研究する際に、多様で複雑な変数を考慮にいれた重層的な分析が必要であることがあらためて総括され、単純な説明図式を採用しようとする方法論的オリエンタリズムの危険性が強調された。また、例えばムスリムの間で生じているある種の階級的な分断は、マジョリティの間に生じている階級的な分断と非常に近似したものであった。エスニック・マイノリティを研究する際には、マイノリティとマジョリティの（文化的な）差異をあらかじめ想定した理論的枠組みを用いるのではなく、むしろ両者の共通性に基づくようなアプローチを選択するべきである。筆者によると、こうしたアプローチに基づく研究は、それぞれの置かれた立場でより良い生を送ろうと奮闘する、一種の普遍的な人間像を描き出すものである。筆者によるとこうした知見は、ムスリムの文化的な差異を強調する今日のイスラモフォビアを前にして、研究者が生み出し得る対抗言説のひとつとなる。

(論文審査の結果の要旨)

フランスのムスリム研究にはかなりの蓄積があるが、大都市郊外の低家賃の団地に集住する層を対象として、そこで起こるコンフリクトや階層上昇の難しさなど、いわば社会問題を体現する社会集団としてムスリムを扱う研究が中心を占めてきた。

旧植民地のマグレブからの移民は、かつては「アラブ人」や「マグレブに出自をもつ若者」などとカテゴリー化されたが、1990年代後半以降、とくに「9.11」以後は「ムスリム」としてカテゴリー化され、「原理主義」や「テロ」と結びつけられることが多くなった。こうしたイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）を背景として、研究においてもこれらの人々を「文化的他者」と想定し、あらゆる問題を文化的・宗教的な差異によって説明する傾向が強まった。本論文はこうした学問的傾向を「方法論的オリエンタリズム」と名づけ、それを乗り越えることをめざしている。

フランスのムスリム研究への本論文の第一の貢献は、多くの既存研究と異なり、ミドルクラスのムスリムを対象としてインタビュー調査を実施したことにある。相対的に見てその人口比はまだ小さいものの、フランス社会にはミドルクラスのムスリムも存在しており、マイノリティがいかにしてホスト社会に「統合」されるのかを解明するためにその経験は貴重である。本論文では、マグレブ三国（アルジェリア・モロッコ・チュニジア）のいずれかにルーツを有する移民第二世代で、イスラーム教徒であることを自認しており、かつ大学卒業以上の学歴を有し、キャリアおよび現在の経済状態なども併せて総合的にミドルクラスに属していると判断できる、女性13人、男性21人、計34人の語りを分析対象とした。年齢は20代から30代前半が中心となった。非常に高学歴のグランゼコールやグランドタブリスマンの出身者が13人にのぼるので、ミドルクラスのなかでも上層のアップーミドルクラスを多く含むサンプルとなったといえよう。インタビューは、十分にラポールを形成してから、しばしば複数回にわたって、ライフヒストリーの全体を聞き取るという方法で実施された。そのため、学校、職場や家庭での日常的実践がその人の人生の中でどういう意味をもったのかを、理解しやすいものになっている。対象者をひとりひとりの個性ある人間として記述し、「私たち」との「差異」よりも「共通性」に注目する道もひらいた。

第二の貢献は、四つの章に分けて展開される彼女たち／彼らの日常的実践のていねいな分析により、「統合」や「同化」という言葉から想像されるものより、はるかに複雑な過程を明らかにしたことである。アラブームスリム風のファーストネームを娘に与えず、アラビア語も継承しなかったケースは、「同化」の典型的な例のように見えるが、たしかに差別を避ける効果があった一方で、外見の違いなどから完全に同化することはできず、また「母語の喪失」は親族との深い交流ができないという痛みを伴った。しかしそのためエスニック・コミュニティでの女性役割からの自由を得たり、ユダヤ人とムスリムの喧嘩を仲裁できたりと、双方での「異邦人性」を巧みに活用して、誇りにもしている。また大企業の正規雇用ホワイトカラー労働者とIT技術者

である男性たちは、しばしば職場でのコンフリクトの原因となる禁酒や食物禁忌などの信仰実践について、ひとりにはアラブ人と区別されるベルベル系のカビル人であることを理由に、もうひとりにはクルアーンの理念の本来の意味に戻り現実を解釈し直すことで、罪悪感をもつことなく回避していた。イスラームは七世紀の中東で誕生したまま一枚岩で不変のものとして扱われる傾向があるが、実際にはムスリムたちの実践によって再構成され日々変容して多様化していることが示された。

第三の貢献は、こうした日常的実践の分析から、「方法論的オリエンタリズム」を超えるための理論的枠組みを紡ぎ出したことである。マグレブ系の保守的な移民第一世代に見られる「移植型イスラーム」が、ムスリム知識人によるクルアーン解釈から導かれる信仰実践を遵守させる傾向があるのに対し、上記のような第二世代にとってのイスラームは異なると本人たちも断言する。両親から継承した宗教的規範や価値観がフランスの規範に不断につきあわされる中で、ハイブリッドなアイデンティティの構築を促すようなイスラームが生まれたのである。これを本論文では「順応型イスラーム」と名づける。現代フランスのイスラームを複数形で表現し、複数の理念型によって捉えようとする立場に立つものである。第二世代でも郊外に住むムスリムはハイブリッド性が薄く、その頑なさへの不快感を「順応型イスラーム」のミドルクラスは隠さない。ミドルクラスのムスリムたちはしばしば自分の出自のハイブリッド性をアイデンティティの源泉としており、フランスのポスト植民地主義的な共和主義イデオロギーに嫌気がさすと国外脱出すらするコスモポリタンなのである。

しかし多様性の称揚で本論文は終わらない。差異に開かれたコスモポリタンの文化を有するミドルクラス、とりわけアッパーミドルクラスのムスリムと、閉鎖的なコミュニティを構築する庶民階級のムスリムとの分断は、フランス社会一般の階級的な分断の反映にすぎない。ムスリムとそうでないものの共通性を前提として、文化的・宗教的な差異ばかりでなく、階級やジェンダーなど多様な差異を分析に取り入れることで、スティグマ化されたムスリム表象を再生産しないことを本論文は提案している。

このような貢献をなした本論文ではあるが、不十分な点が無いわけではない。しばしば批判されるムスリムのジェンダー観について数箇所で言及しながら、それ以上に展開されていないのは残念である。また多くのインタビューを実施しながら、分析に用いなかったものもかなりあることも惜しまれる。しかしながら、これらの点は本論文の価値を大きく損なうものではなく、近い将来に解決されると期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年1月30日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。